京都芸術大学紀要二十七号の発行にあたって

二〇二三年度の京都芸術大学紀要Genesis 27は、作品研究報告、研究論文、研究ノート、調査報告書、史料紹介という多彩な内容で構成されており、今年も読み応えのある学術誌となっている。

大学が刊行主体である「紀要」のもつ意味は何だろうか。専門分野の研究者が集まる学会発行の学術誌とは異なり、さまざまな研究領域の教員の論文や作品研究が集められているのが本学の紀要である。たとえば、一般の学術誌には掲載が困難な、長期にわたる研究成果を数回に分けて掲載することや、学内で実施した新しい教育研究プロジェクトに関する論考など、一般の学術誌には掲載がむずかしい多様な研究成果について、委員会の判断で柔軟に対応できるのも紀要の良さである。その意味では、少し大げさな言い方になるが、その大学の「知力の総量」を表しているといえる。

本学の紀要には、投稿された論文がすべて掲載されるわけではない。投稿論文は、紀要委員会で選ばれた複数の査読者により、採択、修正採択、不採択といった判断がなされ、掲載論文が選定される。「修正採択」となった論文の著

者には、さらに論文の質を高めるために査読者からていねいなコメントが返される。査読はピアレビューなので、査読者のコメントに納得がいかなければ、理由を添えて反論することもできる。その意味で、査読者とのやりとりは研究者同士の切磋琢磨の場でもある。

紀要委員会の委員長を務める君野隆久教授によれば、今号には多数の論文が投稿されたが、査読の結果、掲載が次号以後に持ち越された論文も多数あったそうである。大学紀要はその大学の「知力の総量」と書いたが、しっかりした査読制度のもとで掲載論文を決定し、冊子体、ＰＤＦ版の紀要を発行する、という一連の仕事に対する先生たちの熱量には、研究や制作活動に対するリスペクトが反映されていると思う。

毎年の紀要への投稿、掲載が、本学の教員の方たちの創作意欲、研究意欲を高める一助となることを心から願っている。

二〇二三年九月二〇日

京都芸術大学学長　吉川左紀子